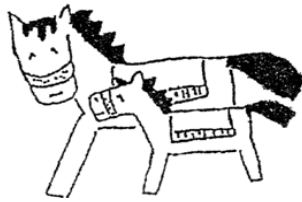


♪  
お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと

28年 3月 NO. 256



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		<b>3月の主な活動</b>		～お気軽にどうぞ～
3月 5日	土	体験保育 10:00～12:00		同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
3月 12日	土	体験保育 10:00～12:00		出産予定の方も育児体験においでください。
3月 12日	土	香川みすゞさんの会 14:00～16:00		坂口正子氏（ミルキーウェイ）の さをり織りのお話や実技をします。
3月 25日	金	健康育児相談 11:00～12:00		園医師（小児科医）にゆっくり相談できます。 (予約要)
3月 25日	金	おはなしの会 10:00～11:30		「春のよるこび」をテーマにわらべ唄や 大型絵本やパネルシアターなどもあります。
3月 26日	土	手品教室 14:00～16:00		今までの手品の復習で演じたり 先輩の手品も楽しみましょう。

・火～土の13時～16時までは、園内開放しています  
ので、親子でご来園下さい。  
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9:00～18:00  
しつけや子育てについての悩み、保育園生活  
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童謡全集⑥  
さみしい王女・下

海のおもてを、鐘の音は、  
海のだこまで、ひびくやら。

死んだ父さま、母さまを、  
こいし、こいしと泣いています。

沖で鯨の子がひとり、  
その鳴る鐘をききながら、

村の漁夫が羽織着て、  
浜のお寺へいそぐとき、

浜のお寺で鳴る鐘が  
ゆれて水面をわたるとき、

鯨法会は春のくれ、  
海に飛魚採れるころ。

くじらほうえ  
鯨法会



平成28年2月20日(土)

夜11時より12時まで、ETV

特集「希望をくれる感動の書 金澤  
翔子ダウン症書家」が放映されまし  
た。生い立ちや国連本部でスピーチ  
する姿、最近母とはなれて一人ぐら  
しのように、書の師匠の指導で20kg以上もある大筆で何回も書き直す書への意欲  
も知りました。



今月は、ダウン症児(第3子)の兄姉との生活や障がい児を持つ母として、教師として  
授業で伝えていることなどをご紹介します。

## あずさからのメッセージ

これまつ  
是松 いづみ

十数年前、障がいのある子がいじめに遭い、多数の子から殴ったり蹴られたりして  
亡くなるという痛ましい事件が起きました。それを知った時、私は障がい児を持った  
親として、また一人の教員として伝えていかなくてはならないことがあると強く感じ  
ました。

そして平成14年に、担当する小学5年生の学級で初めて行ったのが「あずさから  
のメッセージ」という授業です。

梓は私の第3子でダウン症として生まれました。梓が大きくなっていくまでの過程  
を子どもたちへの質問も交えながら話していったところ、ぜひ自分たちにも参加させ  
てほしいと保護者から授業参観の要望がありました。以降、他の学級や学校などにも  
どんどん広まっていき、現在までに福岡市内60校以上で出前授業や講演会をする機  
会をいただきました。

梓が生まれたのは平成8年のことです。私たち夫婦はもともと障がい児施設でボラ  
ンティアをしていたことから、我が子がダウン症であるという現実も割に早く受け止  
めることができました。

迷ったのは上の2人の子たちにどう知らせるかということです。私は梓と息子、娘  
の4人でお風呂に入りながら「梓はダウン症で、これから先もずっと自分の名前も書  
けないかもしれない」と伝えました。息子は黙って梓の顔を見つめていましたが、し

ばらくしてこんなことを言いました。

さあ、なんと言ったでしょう？という私の質問に、子どもたちは「僕が代わりにかいてあげる」「私が教えてあげるから大丈夫」と口々に答えます。この問いかけによって、ひとりひとりの持つ優しさがグッと引き出されるように感じます。実際に息子が言ったのは次の言葉でした。「こんなに可愛<sup>かわい</sup>いっちゃんもん。いてくれるだけでいいやん。なんもできんでいい」

この言葉を紹介した瞬間、子ども達の障がいに対する認識が少し変化するように思います。自分が何かをしてあげなくちゃ、と考えていたのが、いやここにいてくれるだけでいいのだと価値観が揺さぶられるのでしょうか。

さて次は上の娘の話です。彼女が「将来はたくさんの子どもが欲しい。もしかすると私も障がいのある子を産むかもしれないね」と言ってきたことがありました。私は「もしそうだとしたらどうする？」と尋ねました。

ここで再び子ども達に質問です。さて娘はなんと答えたでしょう？「どうしよう・・・私にそだてられるかなあ。お母さん助けてね」。子どもたちの不安はどれも深刻です。しかし当の娘が言ったのは思いも掛けない言葉でした。「そうだとしたら面白いね。だっていろいろな子がいたほうが楽しいから」

子どもたちは一瞬「えっ？」と息を呑むような表情を見せます。そうか、障がい児って面白いんだ・・・。いままでマイナスにばかり捉えていたものをプラスの存在として見られるようになるのです。

逆に私自身が子どもたちから教わることもたくさんあります。授業の中で、梓が成長していくことに伴う「親としての喜びと不安」にはどんなものがあるかを挙げてもらうことがあります。黒板を上下半分に分けて横線をひき、上半分に喜びを、下半分に不安に思われることを書き出していきます。

中学生になれば勉強が分からなくなってしまうのではないか。やんちゃな子たちからいじめられるのではないか・・・。将来に対する不安が次々と挙げられる中、こんなことを口にした子がいました。「先生、真ん中の線はいらないんじゃない？」。理由を尋ねると「だって勉強が分からなくても周りの人に教えてもらい、分かるようになればそれが喜びになる。意地悪をされても、その人の優しい面に触れれば喜びに変わるから」

これまで2つの感情を分けて考えていたことは果たしてよかったのだろうかとの教育観を大きく揺さぶられた出来事でした。

子どもたちのほうでも授業を通して、それぞれに何かを感じてくれているようです。「もし将来、僕に障がいのある子が生まれたら、きょうの授業を思い出してしっかり育てていきます」と言った子。「町で障がいのある人に出会ったら自分にできることはないか考えてみたい」と言う子。「私の妹は、実は障がい児学級に通っています。すごくわがままな妹で、けんかばかりしていました。でもきょう、家に帰ったら一緒に遊ぼうと思います」と打ち明けてくれた子。

その日の晩、ご家族の方から学校へ電話がありました。「“お母さん、なんでこの子を産んだの？”と私はいつも責められてばかりでした。でもきょう、“梓ちゃんの授業を聞いて気持ちが変わったけん、ちょっとは優しくできるかもしれんよ”と、あの子が言ってくれたんです・・・」

涙ながらに話してくださるお母さんの声を聞きながら、私も思わず胸がいっぱいになりました。

授業の最後に、私は決まって次の自作の詩を朗読します。

「あなたの息子は/あなたの娘は、/あなたの子どもになりたくて生まれてきました。/  
生意気な僕を/叱ってくれるから/無視した私を/諭してくれるから (略) おかあさん/  
ぼくのおかあさんになる準備をしてくれていたんだね/私のおかあさんになることが  
きまっていたんだね/だから、ぼくは、私は、/あなたの子どもになりたくて生まれて  
きました」

上の娘から夫との馴<sup>なれ</sup>初<sup>そ</sup>めを尋ねられ、お互いに学生時代、障がい児施設でボランティアをしていたからと答えたところ「あお、お母さんはずっと梓のお母さんになる準備をしていたんだね」と言ってくれてことがきっかけで生まれた詩でした。

昨年より私は特別支援学級の担任となりましたが、梓を育ててくる中で得た多くの学びがいままさにここで生かされているように思います。「お母さん、準備をしていたんだね」という娘の言葉が、より深く私の心に響いてきます。

(是松いづみ=福岡市立百道浜小学校特別支援学級教諭 株) クマヒラ 抜萃のつづり その73より)